

生きる

黒澤明

東宝

1952年

西松 優

日本映画愛好家

私の生き方を変えてくれたかけがいのない映画が『生きる』である。

私が係長になった頃である。当時の部長は部内の特定部門の仕事にしか興味がなく、興味のない部門の仕事には冷淡な人だった。当時私は仕事に対する意欲は高かったが、上司から期待されないことを辛く感じていた。

そんな時に見たのが製作後三十年を経た『生きる』だった。不治の病ガンに侵された主人公の市民課長が最後にたどり着いた答えは、自分の持ち場で住民のために公園作りを目標に命を賭けることだった。その生き方に私は強く共感した。評価されなくても役立つことを信念を持って進めることが大事だと得心した。そして、私は職場の使命を見据え目標を掲げ仕事の改善に積極的に取り組み出し、他部署に異動してからも前向きなマインドを持ち続けることができた。時に苦境に陥るとこの映画のビデオを見ては元気をもらった。お蔭で悔いのない会社生活を過ごすことができた。この映画に感謝したい。

